**「ラーマクリシュナの福音」勉強会　第６３回　（２０２０年５月１０日）**

**・第６３回の勉強範囲：「第三章　ヴィディヤー・シャーゴル訪問」３７頁～３８頁**

**（前回の補足①）**

前回、「なぜ悟る必要があるのか」について話しました。その答えとして「苦しみ、悲しみ、恐れ、疑い、無知がなくならないから」、「輪廻が止まらないから」という理由を挙げましたが、そのようなネガティブ（否定的・消極的）な理由の他に、ポジティブ（肯定的・積極的）な理由も付け加えておきます。それは「安定した幸せ（至福）、平安、知識、自由が欲しいから」という理由です。これら、ネガティブとポジティブは同時に起こります。

たとえばおなかがすいて辛い時、牛乳を飲めば、辛い状態はなくなると同時に力が湧きます。朝日が昇ることによって、暗さがなくなると同時に明るくなります。それと同じです。神の本性を悟ると、苦しみ悲しみがなくなると同時に、至福があらわれます。無知がなくなると同時に、知識があらわます。

我々は常に苦しみ悲しみの状態でもないので、普段はあまり、苦しみ悲しみについて考えていません。そのことを考えると、やる気を育てるためにはネガティブな理由よりも、「至福、平安、知識、自由を得る」というポジティブな理由の方が適していると思います。実際「束縛はいらない、無知はいらない」と祈るより、「幸せが欲しい、知識が欲しい、自由が欲しい」と祈っているでしょう？　もちろん無知がなくならなければ知識はあらわれませんし、苦しみ悲しみがなくならなければ至福はあらわれませんが、悟りへの動機は、より肯定的に考えたほうがいいかもしれないですね。

**（前回の補足②）**

悟って、すべてが一つであると分かると、非利己的になり、普遍的な愛（universal love）が生じると話しました。今の大きな問題は、多くの人が利己的に考え、利己的に行動することです。利己的な人が祈るのは自分と自分の家族のためだけですが、普遍的な愛を実践する人は、自分と家族とすべての人の幸せのために祈ります。勉強会の前には「普遍の祈り」（Universal Prayers）を唱えますが、普遍的な愛をもってすべての人々のために祈っているのです。コロナウイルスの問題で、お金を稼げない人のために近所の人が食事をシェアすることもあるそうですが、それは普遍的な愛の実践の一つですね。

**（５月の勉強）**

[＊ヴィディヤー・シャーゴルは、ベンガルの偉大な教育家、博愛家です。ヴィディヤー・シャーゴルという人物の特徴は、2019年8月のテキストデータにあります]

**📖読み**

**『福音』３７頁上段　後ろから５行目**

*（微笑して、ヴィディヤー・シャーゴルに）さて、あなたはどういう態度をとっておられるのですか？」*

*ヴィディヤー・シャーゴル（微笑しつつ）「いつか、あなたに打ち明けましょう」（みな笑う）*

（解説）

「*あなたはどういう態度をとっておられるのですか？*」とは、「神様について、あなたはどのように考えていますか？」という意味です。

信者の信仰態度にはいろいろあります。ヒンドゥ教では「形がある神」も「形がない神」も信仰しますが、ギャーニは「形がない神」（ブラフマン）を信仰し、バクタは「形がある神」を信仰します。ブラーフモー・サマージの場合は「形はなく、性質のある神」を信仰していました。また「形がある神」にもいろいろあって、ラーマ神、クリシュナ神、シヴァ神など、信者の信仰の対象はさまざまです。

それに不可知論（agnosticism）という考えもあります。不可知論者（agnostic）は「神はいるとしても、人間が神を理解することなど不可能だ」と考えて、「神を悟るための霊的実践は無駄だ」と考え、「できるだけ人助けをする」などの道徳的実践が人生の目的になります。

このように、信仰の態度には様々あるので、シュリー・ラーマクリシュナはヴィディヤー・シャーゴルに神に対する態度について率直に尋ねたのです。しかし突然の、個人的な質問でしたから、ヴィディヤー・シャーゴルは「*いつか、あなたに打ち明けましょう*」と言葉を濁しました。周りから尊敬されている人ほど、人前で個人的な質問に答えるのはためらうものです。もしシュリー・ラーマクリシュナだけしかいなかったなら、ヴィディヤー・シャーゴルは多分答えたでしょう。「*いつか、あなたに打ち明けましょう*」という彼の返答は、「個人的にあなたにお伝えします」という意味です。

シュリー・ラーマクリシュナはどのような会話を続けましたか？

**📖読み**

**『福音』３７頁下段　L１**

*師（笑いながら）「神は、たんなる学問推理によって悟ることはできません」*

（解説）

**勉強と識別だけでは悟ることはできない**

「*学問推理*」ですが、学問は「勉強」、推理は「識別」という意味です。ちなみに英語版では「scholarly reasoning」、原著ベンガル語版では「ヴィチャーラ（識別）コレジャナジャーヤ（聖典の勉強）」となっています。つまり、どんなに多くの聖典を読み、たくさん勉強をしても、それだけでは神を悟ることはできない。と同時に、どんなに識別をしても、それだけでは神を悟ることができない、という意味です。また勉強と識別を合わせてしても、それだけでは神を悟ることはできません。

**識別**

ヴェーダーンタ哲学の識別とは、非実在（＝一時的なもの）と実在（＝永遠無限なもの）とを見分けて区別することです。それを個人について、宇宙について、行います。［＊識別＝物事の種類や性質などを見分けること（大辞泉）；物事の相違を見分けること（大辞林）］

**ヴェーダーンタ哲学での識別の方法──ミッティヤとアサット**

ヴェーダーンタ哲学における識別を説明するために、ミッティヤとアサットという２つのサンスクリット語の解説をします。

ミッティヤとは「存在はあるが、永遠ではないもの」のことです。たとえば人間です。人間の存在は認識することができるので存在はあると言えますが、永遠ではありません。

アサットとは「存在がないもの」（nonbeing、nonexistence）のことです。すなわち「存在の根拠（基礎）がないもの」、単なる想像や幻覚です。雲が巨大な建物のように見えても、それは想像ですからアサットです。砂漠に行って、あるはずのない水が見えても、水は幻覚ですからアサットです。

ですが、ありもしない水が見えるという蜃気楼現象自体はミッティヤです。なぜなら「水はないが、水のように見せる蜃気楼現象の基礎（＝砂）はある」からです。同じように、暗闇でヘビを見たが実際は縄だった場合、へビはミッティヤです。ヘビには存在の基礎、すなわち縄があるからです。

このように、アサットとミッティヤの違いは、存在の基礎が無いか／有るかです。つまり、ある存在について、幻覚（hallucination）に見えるのがアサット、錯覚や思い違い（illusion）に見えるのがミッティヤです。そしてミッティヤの基礎が、正しいもの、すなわちサッティヤ［＊直訳は真実］です。

人間についてさらに考えてみましょう。先ほど、人間の身体や心はミッティヤだと説明しました。ではその基礎（サッティヤ）は何でしょうか？　魂です。それが正しいものです。

──ヴェーダーンタ哲学の識別は、このように考えを集中させて行っていきます。

**悟りへのステップ──①聖典の勉強と識別、②神を集中して考える**

ですがシュリー・ラーマクリシュナは、それだけでは神の本性を理解することはできないと言っています。神に、真理に、集中しないと悟ることはできません。

識別の目的は何ですか？　何が永遠か、何が真理かを理解することです。それについて、最初は聖典を勉強して頭で理解します。なぜなら今の我々の理解の状態は、「真理と真理ではないもの」、「一時的と永遠無限なもの」が混ぜこぜになっているからです。たとえば心と魂の区別がついていないように。

ですからまずは、混ぜこぜになった中から、「永遠なもの」を選り分ける必要があります。それは砂糖と砂が混ざった山があるとして、砂糖の粒と砂の粒を選り分けるようなものです。

ですが目的は、選り分けることではありません。甘い砂糖を味わうこと、つまり神を悟ることです。選り分けただけで終わったら、もったいないではありませんか？　ですが今は砂糖と砂が混じっている状態ですから、最初の段階は識別をします。

神を悟るという目的に向かって、最初の段階は真理や神について勉強し、集中して識別します。そして次の段階は、神や真理を集中して考えるという実践です（＝瞑想）。識別は目的のために重要で必要ですが、それが最終ではない、ということです。

**神への愛がなければ悟れない**

識別を楽しむことが目的となってしまったお坊さんや信者がいます。彼らは「これはブラフマンではない」「これは非実在、これは実在」という識別が楽しくなってしまったのです。だから次の段階に進みません。インドではそのような人たちを「ヴィチャーラ・アナンディ・サードゥ」（識別を楽しむ僧）などと呼びますが、彼らが悟りという真の目的に到達することはありません。

「神への愛はないが、聖典の勉強が好き、識別が好き」ではあまり意味がないのです。どんなに勉強して識別しても、それだけでは神を悟ることはできないからです。神への愛がなければ、神様のことをつねに考えていなければ、神を瞑想しなければ、神を悟ることはできません。そして神を悟れなければ、本当の幸せは得られません。だからシュリー・ラーマクリシュナは「*神は、たんなる学問推理によって悟ることはできません*」と言ったのです。

**頭で理解することと悟ることは全く違う**

「頭で理解することと悟ることは全く違う」というポイントは、『福音』の中に何回も出てきます。聖典勉強だけでは、幸せを得られません。自由になれません。勉強したことが、困った時の助けになりません。

『バガヴァッド・ギーター』に「いかなる武器であろうと、魂を切り刻むことは出来ぬし、火で焼くこともできない」(2-23)とありますが、それを勉強した人が犯罪者に遭遇したとしたら、彼はどのような態度をとるでしょうか？　怖くて逃げだすでしょうか、「私は魂である、魂を殺すことなどできない」と考えて無恐怖でいられるでしょうか。二者は大きな違いです。頭だけで理解している人は、きっと恐怖で逃げ出してしまうでしょう。

古代ギリシャのアレクサンダー大王がインドに遠征した時のことです。「高徳な賢者に挨拶したい」と思い、年配の賢者を探し出して面会しました。大王は賢者をギリシャに連れて帰りたく思い、「私の国に一緒に行こう」と誘いましたが「行きたくありません。私はここで十分です」と断わられてしまいました。怒って「命令に従わなければ、殺してしまうぞ。私にはお前などすぐに殺せるのだ」とおどかすと、賢者は笑って「大王様、あなたの話はばかげています。私の身体を殺すことはできても、私を殺すことなどできません」、さらに「大王様、それにあなたは嘘つきです。あなたが私を殺す、というのは真実ではないからです。武器で身体を殺すことはできても、私を殺すことはできません。私は永遠なのですから」──それが悟った人の言うことです。

ですが頭だけの勉強では、死の恐怖、嫉妬、うぬぼれはなくなりません。『バガヴァッド・ギーター』で、アルジュナが「悟った人は、どのような特徴をもち、どのような言葉を語り、どのように座り、どのように歩くのか？」（2-54）と質問しているのも、悟った聖者か見せかけの人かを見分ける術を知りたかったからでした（👉雑誌『不滅の言葉』2019年11月号「バガヴァッド・ギーター　人生に生かす真理」）。振る舞い（態度）を見て、そこに死の恐怖、嫉妬、うぬぼれの印があれば、どんなに上手に聖典の話ができても、悟った人ではありません。悟っているのか、頭だけの理解なのかは、振る舞いを見れば分かるということです。

シュリー・ラーマクリシュナや、直弟子のスワーミー・アドブターナンダジーは、勉強をほとんどしたことがありませんでした。しかしどちらも悟った人でした。「たくさん勉強しても悟っていない人」と「勉強していなくても悟った人」は大きな違いです。悟るためには大学に入って勉強しないといけないと考える人もいますが、そうではないのです。それに卒業試験や博士号を取るために、どれくらい寝ずに勉強したかを考えると、それに比べて悟りはもっと簡単ではないですか？　悟るためには体がやせるほどの勉強や、試験の結果への心配は必要ありません。必要なことは、神への愛を増やすこと、心を清らかにすることです（👉先月のテキストデータ）。

**📖読み**

**『福音』３７頁下段Ｌ３～３８頁上段Ｌ３**

*神の愛に酔って、師はおうたいになった。*

*カーリーが何であられるか、誰が理解できるだろう。*

*六派の哲学さえ、を示す力は持たない。*

*聖典は言う、の中にすべての喜びを見いだすヨーギーの、*

*内なるであるのが彼女だ、そのやさしい意志により、*

*すべての生きものの内に宿るのが**である、と。*

*大宇宙も小宇宙も、母の胎内に宿る。*

*さてそれがどんなに広大であるのか、分るか。*

*ムーラーダーラの中で、またサハスラーラのなかで、ヨーギーはを瞑想する。*

*シヴァ以外の誰が、彼女のありのままの姿を見たか。*

*広大な蓮華のなか、彼女は配偶者である*

*白鳥（シヴァ、絶対者）のかたわらで遊ぶ。*

*人が彼女を悟ろうと願うとき、ラーム・プラサードは笑わずにはいられない。*

*彼は言う、を知ろうと思うことはちょうど、*

*果てのない海を泳ぎ渡ることができると思うのと同じようにおかしい、と。*

*しかしああ！　頭は理解してもハートはまだ理解しない。*

*小人であるのに、それはなお、月をとりこにしようとする。*

（解説）

この歌詞について、少しずつ説明します。詩の作者はラーム・プラサードで、この歌は『福音』の中に何回も出てきます。最後の「小人の話」は前回の勉強会の時にしました。［＊映像データ1：08辺りから、メロディーを聴くことができます］

**歌詞の解説（１）**

まず「マザー・カーリーの本性は何か。それは6つの哲学の勉強だけでは知ることはできない」と言っています。ヒンドゥ教には六つの哲学（六派哲学：sad darsana）があります。①サーンキヤ、②ヨーガ、③ニヤーヤ、④ヴァイシェーシカ、⑤プールヴァ・ミーマーンサー、⑥ウッタル・ミーマーンサー＝ヴェーダーンタです。

哲学（ダルシャナ）を学べば、真理とは何か、神の本性とは何か、どのように理解するのか、どのように悟るのか、悟りの障害は何か、悟りの結果は何か、等を知ることができます。ですが勉強だけで終わらせず、実践することが大事です。勉強と実践の２つが重要です。

『福音』の中に「手紙を捨てた男」の話がありますね。

**👉（P467　下段）**

*ある男が手紙を失った。どこに置いたか忘れてしまったのだ。彼はランプをつけて探しはじめた。二，三人の人びとが探した結果、手紙はやっと見つかった。そこに書かれている用向きは、「五シェールのサンデーシュと一着の衣服とを届けてください」というものだった。男はそれを読むと、手紙は捨ててしまった。もういらなかったからだ。今や彼のすべきことは、五シェールのサンデーシュと一着の衣服を買うことだけだったのである。*

この人は、やっと見つけた手紙の内容を一生懸命集中して覚えました。そして、覚えたら手紙はごみにして捨てました。手紙の目的は内容を知らせることです。ですから内容を覚えてしまえば、もう手紙は必要ないのです。

聖典も手紙と同じです。聖典には悟るために必要なことが書いてあります。それを伝えるのが聖典の役割です。聖典の教えを身に付けてしまえば、もはや聖典は必要なくなります。

さまざまな哲学や聖典があるのは、人によって物の考え方、力、理解度、好みが異なるからです。ある人にふさわしいのはヨーガ哲学かもしれないし、別の人にはヴェーダーン哲学かもしれません。しかしどの道を行っても、最初の段階は勉強です。それを集中して行い、学びが身に付いたら聖典は脇に置き、悟りという目的に向かってさらに進むのです。

**歌詞の解説（２）**

次に「聖典の考えで、マザー・カーリーはヨーギーたちの内なる自己です」と言っています。

ヨーギーたちの内なる自己は、マザー・カーリーです。彼女が至福の源です。すべての至福は内なる自己からあらわれています。内なる自己とはマザー・カーリーです。

**歌詞の解説（３）**

そして「全てのもの、全ての存在、全ての生き物の中に、マザー・カーリーは存在しています」と言っています。なぜならマザー・カーリーは遍在ですから。

**歌詞の解説（４）**

次に「マザー・カーリーは全てのものに遍在です」を言い換えて、「マザー・カーリーの胎内に全てのもの（大宇宙：macro cosmosと小宇宙：micro cosmos）があります」と言っています。しかし誰もそれを知りません。ただ、シヴァ（マハー・カーラ）だけがマザー・カーリーの本性を理解しています。

**歌詞の解説（５）**

次に、ムーラーダーラとサハスラーラというチャクラが出てきます。

我々の中には７つのチャクラがあります。下から、ムーラーダーラ⇒スワーディシュターナ⇒マニプラ⇒アナーハタ⇒ヴィシュッダ⇒アッギャー⇒サハスラーラです（👉『パタンジャリ・ヨーガの実践～そのヒントと例～』ｐ149）。

ムーラーダーラ・チャクラは背筋の一番下にあり、そこではクラ・クンダリニーと言われる霊的な力が、ヘビのようにとぐろを巻いて寝ています。この詩の重要なポイントは、マザー・カーリーをクラ・クンダリニーという霊的な力としてイメージしていることです。その霊的力は実践が進むと目覚めます。目覚めて各チャクラを通り、上へと上がっていきます。

最初はムーラーダーラ、次にスワーディシュターナ、そしてマニプラです。これらのチャクラは「排せつ」「生殖」「食事」に関連するチャクラですが、実は我々のほとんどはこれらのチャクラの範囲内にいます。しかしそれでは形は人間でも、心は動物とあまり変わらない、ということになってしまいます。ですから我々の最初のチャレンジが、マニプラから上がってアナーハタに行くことです。

胸のチャクラ、アナーハタへと上がるにはたくさんの霊的実践が必要で、アナーハタに上がったことがすなわち「霊的実践が進んだ」証明となります。アナーハタの次は喉のチャクラであるヴィシュッダ、次に眉間のチャクラであるアッギャー、そして最後が頭のチャクラ、サハスラーラです。

サハスラーラはシヴァの場所、ブラフマンの場所です。そこで下から上がってきた霊的な力（＝マザー・カーリー、クラ・クンダリニー、プラクリティ）とシヴァが同一すると、サマーディの状態に入ります。ヨーギーは常にそのことをイメージして実践しています。

**歌詞の解説（６）**

翻訳の歌詞には「*白鳥（シヴァ、絶対者）*」とありますが、元々の歌詞には「ハンサ」（白鳥のオス）と「ハンシー」（白鳥のメス）という２つの単語が出てきます。それが「白鳥のオスとメスの合一」というイメージにつながるのです。すなわちサハスラーラ・チャクラでのシヴァとカーリーの合一（＝プルシャとプラクリティの合一）の比ゆです。翻訳の歌詞にハンサとハンシーにあたる言葉がなければ、そのことが伝わらない可能性がありますね。［＊英語版と日本語版の歌詞にはそこまで書かれていない］

**歌詞の解説（７）**

作者「*ラーム・プラサード*」の願いは、「心をサハスラーラまで上げて、サマーディの状態に入りたい（悟りたい）」ということですが、それは野望とも言えるような、大変高く大きな望みです。

たとえば国の首相になりたい、大金持ちになりたい、有名な学者になりたい、有名な歌手になりたい等の大志を抱いた人がいたとしても、その人の力量を考えれば、無理だということはあるでしょう。ホームレスが「ビル・ゲイツのような大金持ちになりたい」と言うと、周りの人は不可能だと言って笑います。これらは世俗的な願いの例ですが、ラーム・プラサードのように霊的な願いであっても、「サマーディの状態に入りたい」という願いを聞いたら周りの人は笑います。なぜなら野望のように高く大きな望みですから。それに比べたら、我々の力は無いに等しいですから。

サマーディに入ることがどれほど困難かという描写が、歌詞の中に２つ出てきます。1つは「*果てのない海を泳ぎ渡ることができると思う*」ことです。英仏間のドーバー海峡を泳ぎきることはできても、果てしのない大海を泳いで渡るのは無理です。あまり泳げない人がそのような願いを語ったら、皆笑うことでしょう。もう1つの例は、「（dwarf）が月を触りたいと思う」ことです。（👉先月のテキストデータ）

ですが、世俗的な大志は無理であっても（たとえ、宝くじに当たって金持ちになったとしても、一番の金持ちにはなれません）、霊的な大志は神の恩寵で可能です。

**📖読み**

**『福音』３８頁上段Ｌ４～Ｌ９**

*つづけて、師はおっしゃった、「ききましたか。*

*大宇宙も小宇宙も、母の胎内に宿る。*

*さてそれがどんなに広大であるか、分るか。*

*また詩人はこうも言っています。―─*

*六派の哲学さえ、を示す力は持たない。*

*たんなる学識では、を悟ることはできないのです。*

（解説）シュリー・ラーマクリシュナは、勉強と識別だけでは悟ることはできないと繰り返して言っています。

**📖読み**

**『福音』３８頁上段Ｌ１０～下段　後ろから４行目**

*人は信仰と愛を持たなければいけない。信仰はどんなに力の強いものであるか、一つ話しましょう。ある男が、セイロンからインドに向かって海を渡ろうとしました。ビビシャナが彼に、『これを自分の衣服のはしにくくりつけて行け。そうすればお前は無事に海を渡るだろう。水面を歩いていくことができるだろう。しかし決して、中身を調べてはいけないぞ。それをすると沈むだろう』と言いました。男はやすやすと海面を歩いて行きました――信仰の力とはこのようなものなのです――そのとき、途の半ばを行ったところで、彼は思いました、『私が水の上さえ歩くことができるとは、ビビシャナがくれたこの不思議なものはいったいなんだろう』と。彼は結び目を解き、ラーマという名を書きつけた一枚の葉だけを見つけました。『なんだ。こんなものか！』と彼は思い、そしてたちまち沈んでしまいました。*

*ハヌマーンはラーマの御名(みな)への彼の信仰によって海を飛び越えたが、ラーマ自身は橋をかけなければならなかった、という話があります。*

*人がもし神への信仰を持っているなら、たとえ罪を犯したとしても――いや、極悪の罪を犯したとしても――恐れる必要はありません。*

*それからシュリー・ラーマクリシュナは、信仰の力をたたえる歌をおうたいになった。*

*もし私が、ドゥルガーの御名をとなえつつ死ぬことさえできるなら、*

*どうしてあなたが、おお聖きお方よ、*

*私に救いを拒むことがおできになりましょう、*

*たとえ私が、みじめな奴でありましょうとも……*

（解説）

**安定した深い信仰の印**

信仰はとても大事です。「信仰」についての普通の人のイメージは浅く、たとえば「神様を信じていますか？」という質問に「信じている」とか「信じていない」とか答える程度のものです。信仰についてのイメージはその程度です。しかし浅い信仰はすぐに壊れます。

本当の信仰とは何でしょうか？　安定した、深い信仰の印は何でしょうか？

聖書には、「信仰とは何か」というイエスの教えが書かれています。

*──If you have faith the size of a mustard seed, you will say to this mountain, ‘Move from here to there,’ and it will move; and nothing will be impossible to you.*

*もし、からし種一粒ほどの信仰があるなら、この山にむかって『ここからあそこに移れ』と言えば、移るであろう。このように、あなたがたにできない事は、何もないであろう。*（マタイによる福音書17:19–21）

もしも辛子種ほどでもよいから、本当の信仰があったら、「富士山よ、静岡から九州に引っ越しなさい」と命令しても、富士山は従います。もしあなたが本当に「神様が守ってくださっている」と信じていれば、ホーリー・マザーの言葉「息子よ、娘よ、覚えていてください、私はあなたをずっと守っています」を信じていれば、死の恐怖は全くなくなります。それだけでなく、すべての心配、恐れがなくなります。さらには忍耐強くなります。なぜならすべてを神にお任せするからです。

ですから「死の恐怖もあります、信仰もあります」というのは矛盾です。また我々に忍耐がないのは、神にお任せできていない証拠です。

そして、神への信仰が本当にあれば、神は絶対に願いを聞きます。その疑いはありません。声に出して言わなくても心で祈っても大丈夫。なぜなら神は我々の心の中に座っているからです。すべてご存知だからです。ではなぜ神は願いを叶えてくださらないのでしょうか。

１つには、我々が完全に神にお任せできていないからです。もう１つには、良い願いは必ず叶いますが、いつ叶うか分からないからです。ですから我々は「待つ」ことが必要となりますが、待てるということが本当の信仰の印です。忍耐がなくて待てないのなら、神を信じていないことになります。

それから、世俗的な願いが叶わない場合は、その願いがその人にとって良くないからです。もうひとつ。良い願いは必ず叶えてくださいますが、「清らかになりたい」「悟りたい」「神様、お姿をお見せください」という種類の願いは、すぐには成就しません。成就するには時間が必要だからです。

ある時、信者がスワーミー・サーラダーナンダジー（シュリー・ラーマクリシュナの直弟子の一人）に尋ねました、「マハーラージ、シュリー・ラーマクリシュナの恩寵を受けているあなたは偉大な霊力をお持ちです。だからもし私が神のヴィジョンを望めば、あなたはそれを叶えられるはずです。それほどの力をお持ちだと私は思っています」。サーラダーナンダジーは「はい。しかしその反動であなたは耐えられなくなり、２つのことが起こる可能性があります。死ぬか、頭がおかしくなるかです」と答えました。

身体と心の準備が重要です。身体と心が強くないと、耐えきれないのです。ですから時間をかけて準備をしてください。神への深い信仰があれば、長時間待つこともできます。「神様は絶対に叶えてくださるが、いつかはわからない。そこまで私は我慢します」、その種類の信仰が本当の信仰です。

安定した深い信仰の印は、

・死の恐怖、恐れ、心配がない

・いつも心静か

・いつも幸せ

・我慢忍耐できる

ですが、これらの印は、霊的実践の結果、あらわれます。

たくさんの準備と実践をして、心と身体を清らかにして、最終的に本当の信仰が得られます。本当の信仰を得たら、すぐに悟ります。『福音』の中に出ている「船のマストにとまっていた一羽の鳥」──それが本当の信仰の例です。次回も信仰の話を続けます。

**👉**「船のマストにとまっていた一羽の鳥」**（P852　上段）**

　*一羽の鳥がうっかりと、ガンガーに停泊している船のマストにとまった。ゆっくりと、船は動きはじめて外洋に出た。鳥が気づいたときには、どちらを向いても陸地は見えなかった。鳥は陸に行こうとして、北のほうに飛んだ。非常に遠くまで飛んでたいへん疲れたのだが、岸を見いだすことはできなかった。いたしかたがない。鳥は船に戻ってきてマストにとまった。長いことたってから、鳥はふたたび、今度は東に向けて飛び立った。この方向にも、陸は見えなかった。見わたすかぎり果てしない大洋だった。疲れ切ってまた船に戻り、マストにとまった。長いこと休んだあとに、鳥は南に、ついで西にも行った。どちらの方角にも陸の影を見いだすことができなかったので、鳥は帰ってマストの上に落ちついた。鳥はもうマストを去ろうとはせず、それ以上はなんの努力もしないですわっていた。もう不安も悩みも感じなかった。心配をしなくなったので、それ以上の努力はしなかった。*

＜Q＆Aより抜粋＞

Q）クラ・クンダリニーが上昇しているのはどのように知ることができますか？

A）性格の変化でわかります。「性格の変化」という意味は、前に比べて、心が清らかになっている、などです。たとえば「まばゆい光を見た」ということがあっても、幻覚の可能性もあります。幻覚を見て想像している可能性もあります。もし本当の霊的な光を見たらば、絶対に性格は変化します。以前にあった怒り、うぬぼれ、強欲、肉欲などが絶対に減ります。

Q）その霊的な光を経験した時には、性格は突然、変わるのですか？

A）突然ではありません。前から準備した結果、変わります。そのとき一回だけ光が出ても、心と身体の準備がなかったら、頭がおかしくなる可能性もあります。また、普通の世俗的な人のような性格をまだ持っていたら、その種類の経験が一回あっても意味がありません。

Q）信仰する気持ちが深かったら、早く神様のそばに行きたくなって、早く死にたくなる、ということはあるでしょうか？

A）死ぬことと悟りとは全然関係ないことです。悟ることと死ぬことは一緒ではありません。悟りとは「生きている間に真理を悟る」ことです。その結果で解脱はできます。ですけれども生きている間に解脱もできます、死んだあとに解脱もできます。しかし死んだあとの解脱は、悟りとは言いません。誤解しないでください。皆さんは、悟るとすぐ死ぬと思っていて、それが怖いから悟りたくないと考えるかもしれませんが、それは間違っています。悟ると死ぬ、ということではありません。

（20200510『福音』勉強会）以上）